

第14章 旧「月光山本道寺」への原点回帰

あらためて原点に立ち返って、旧「月光山本道寺」の命名由来から学ぶこととする。太陽・日と太陰・月は天空の両眼として崇められて来た。私は素人目線で直感したことがあり、有体に申して、地元の人達は伝統という名の既成概念に塗れて自己陶醉・自己隔離金網ネットを巡らしていないだろうか？ この言葉は私自身に対する自問でもある。

1. 一つ目の道標

図-1、口之宮湯殿山神社（旧本道寺）境内東端に建立の本通り入口道標「月山湯殿山 参詣道 本道寺口」に、心が洗われる意義深い次の詩が刻まれている。

“ どうあらん 湯殿の道を踏みしめて 人の本道探し旅 ”

これが、本件始まり全ての基点であり、心の終結の基点である。



図-1

詠み人知らず、天から垂れて来たものだということが、この道は月山を目指すだけの単なる登山道ではないということを訴えていると理解している。本通りに分け入ったならば、景色のみに見惚れてただ漫然と歩くことだけの山道にしてはならない、心を磨く山登りにしなさいということだろう。まさに人が真っ当に生きるための「中道正観」（空海の金言）行、本道探し旅と心得て臨みなさいという激励なのであろう。

2. 旧本導寺開基

「日・月」に込めた御大師の心は共生供華の散花であったろうと読み解く。弘法大師こと空海は、大同4（西暦809）^丑年4月8日湯殿山を開基した、引き続き大師は同年8月8日に山号寺号を「月光山光明院」と名付けて本道寺を開基した。その由緒について山内志朗さんの「本道寺世代記考案（稿）」に図(表)-2のような記述がある。

「－・・・浄土口に表裏の二口ありと雖も、大師当山の口を以て日参したまふ最初の道なる故に参詣の道の本なり。これ則ち本道なり。因りて本道寺と号し、初めて居の地を尋ねたまふ時、月光の如く光明顕れたるを以て月光山光明院と名づく。・・・－」

図(表)－2

その後の天長3(西暦827)年に湯殿山大権現を勧請して「月光山本道寺」と改号したが、山号は『月光山』で共通的で変わらない。明治7年(1874)年7月10日、奥の院湯殿山が国幣社に祀替えになるに及んで本道寺も還俗し、口之宮湯殿山神社と改称し現在に至っている。

空海は月光山光明院と名付けるに当っては、理由があったはず、それを推理して見る。人の名付けは成長を願って、立派な人間になって欲しい、という親の願いを込めるが、同様に「月光山光明院」と名付けた大師の教えを学ぶ必要がある。

以下しばらく空海になったつもりで記述する。

.....
相対(待)陰陽二元の世界観がベースにある。宇宙的な存在という面での地球－太陽－月の関係とその作用・働きという面である。その中における「火(すなわち光、明、熱)」と「水(すなわち影、暗、冷)」を対比する、太陽と太陰の対比を意図する。双方の持つ神聖性に人間観による精神的意味付けを図った。

一つ目の命題(キーワード)は「火(すなわち光、明、熱)」の側面で、天地人三位一体における天空を舞台とする。

照らすものと“照らされるもの”の共存共栄を意図した。月は太陰のお月様であり、光は正真の明かりを放つ太陽であることは言うまでもない。日(太陽)と月(太陰)は、能動と受動、主体と客体、強と弱、優と劣などの対極的性格の「もの・こと」を相待(対)視する時の陰陽二元の象徴として使うことが多々ありこれを片隅におく。

太陽は月を照らしたから光量(発光・発熱のエネルギー)が減ったと愚痴を言わない。一方的に与えるのみで自分は貰うことはなく、他に要求しない。恩着せがましいほざきなどは微塵もない。また、月も暗くなって、光が足りない、もっと欲しいなどの文句を一言も吐かない。そもそも、月は自ら発光せず、太陽の光を受けている、反射しているに過ぎないのだ。地球から見ると光る形も変化する――朔望の変化(新月、三日月、満月)はみかけの形が日々変化し、明暗という正反対の様相を演出するのだ。太陽－月(地球を公転)－地球(自転しながら太陽を公転している)の三者の相対位置関係で変化している、太陽が影武者なのだ。

太陽の如くとは言っていない。「月光の如く」とまずは月を立てた、太陽が威張って、月に対してオレが照らしているのだ、俺があつての君だ“なんて微塵もない。

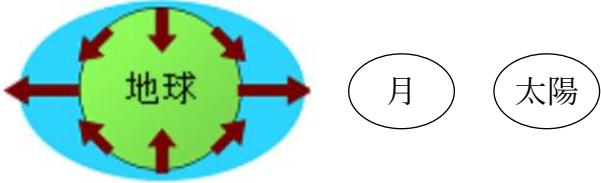
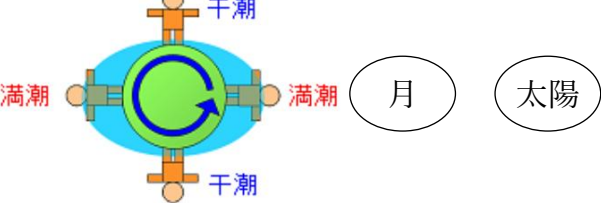
太陽(日)は光熱を発し、形は同じだ。

太陰(月)は光熱を受け、形は変わる。

発があつて受がある。受があつて発がある。受がなければ発はなく、発がなければ受はない、性質の違うものがあつてこそその相互必要・相互依存・相補性に昇華するのだ。

二つ目の命題（キーワード）は「水（すなわち影、暗、冷）」の側面で、天地人三位一体における地球を舞台とする。

地球－太陽－月の3者に係る引力関係で潮の干満現象が生じる。その潮汐が起こる主な原因は、月が地球に及ぼす引力と、地球が月と地球の共通の重心の周りを公転することで生じる慣性力を合わせた「起潮力」である。地球と太陽との間でも、同じ理由でやや小さい起潮力が生じる。物理現象はそのとおりであるが、3者の複雑微妙な力関係が複合する中あって、月が主役的に働いて水（海水・潮）に直接的に影響し、干満という正反対の現象――変化と規則性の現象を生み出すのである。

	起潮力は地球を引き延ばすように働く。
	地球は一日一回自転するので満潮・干潮は1日2回ずつ発生する。

なお『柴明場』の『明』は日と月、るる記述した内容を含め、湯殿山と月山を意図したものであろう。自分（大師）の御影と、ライバルである最澄（伝教大師）の御影を並べて、踏み絵を迫って何かをするなどということは一度もなかった！　そう、私（大師）が本道寺と縁を持った時は、

“私は、出羽三山の中で本髄は湯殿山のみだ、月山と羽黒山は邪念の塊^{かたまり}だ！”

“あなた方はどこを目指すのか？　湯殿山か、月山か、羽黒山か”なのか？

などと三山の一つだけを肯定して他を否定したか？　二者択一を迫まったか？――そんなこととはまったくの無縁の崇高な教えをここ旧本道寺に植え込んだのだ。

このように宇宙の深遠な現象を心として、本道寺に名付けたのである。本道寺の『本』は元・源の意であり、私（大師）が宗祖の密教根本仏である大日如来は、何かを区別・差別・分別する、他と比較して優劣を判定するなどとはまったく無縁な仏、絶対公平・絶対慈愛・無量無限、広大無辺を説く。「月光山本道寺」の表層的な字面のみに捉われ、本尊の「大日如来」単尊のみに拘ることを、私（大師）は警告する。本尊は私の教義の象徴（旗印）として与えたものであり、みんなの信仰心を支配するための道具にしてはならない。

.....

詳細な書付がない以上は、遡って、往時の社会情勢や人々の信仰心や空海の心に深く入り込んで、洞察（昔に穴を掘って潜り込んで）し、そしてこの現時に戻って、今世の価値観をまぶして新しい意義付けを図ればそれで済むことである、この姿勢は他に何ら危害を加えるものではない。今以って、このような清新な気流を発信・発送し続けている旧本道寺（現口之宮湯殿山神社）を基点とする教訓散華の高清水通りであるということを再認識しながら本件活動を推進して来た次第である。

3. 修験道精神の原点

修験道は、すなわち大日如来（不動明王）を本尊として、それと一体化を目指す修行となれば、火と水のような対極的・対立的性質の「もの・こと」の調和を図ることを究極の目的とする修行であろうと考える。火は太陽（日）の聖性、水は太陰（月）の聖性である。火と水は、その素質において当事者同士の間接対待は永遠に反発と対立する。それを、火と水はその性質において「水剋火」——陰陽五行説にある水は火を消す、他方で「火剋水」——火は水を消す（私説）という。そこに第三者たる人間が介在し、火（熱・太陽の日）を引き寄せ、水（冷・太陰の月）を引き寄せ、相反するものを混合・応用の利活用を図ると、それぞれの個性・特徴に調和が生じて利便性を齎す。修験道はなぜ、火と水に拘るのか、両方とも浄化に供するものだから、物理的に焼き尽くす、物理的に汚れを洗い落すということもあるけれど、精神の浄化と重ねるからの意義であろう。相対立する火と水の両方を上手に操るには柔軟でなければならぬ、一方に偏ってはならないという強力なメッセージを発信しているのである、それを表現するのが修行である。子孫繁栄（男と女の交合に体熱と汁・液が生じ）、五穀豊穰（日照と降雨の適順があつて）、鍛冶・金属加工（あらゆる金属の成型に火と水が必要）はその例である。取り込まれた火と水は互いに必要不可欠なものとなり、吸引し合うものと見做すことが出来る。修験道においては総じて、火性と水性を時として持出し、取上げ、具象化する意図は、そもそも優劣を競いさせ、対立・勝負を煽り、片方を駆逐する、一方を追放するという片側収斂に持ち込む目的ではなく、違った・異なったままの個性・特徴の最大限発揮を促すべく、相互尊重を重んずるべく、切磋琢磨・強化合宿の上で共存共栄を目指すせめぎ合いの舞台を設けることにある。

ろっこんしょうじょう おおほらえ
「六根 清 浄 の大 祓」を取り上げる。六根とは、仏教でいう「眼（目）・耳・鼻・舌（口）・身・意」を指す。

あまてらしまず すめおおかみ のたま
天 照 皇 太 神 の 宣 は く
ひと すなわ あめ した みたまもの
人 は 則 ち 天 が 下 の 神 物 な り
すべか しずま こと つかさど こころ
須 ら く 静 る 謐 を 掌 る 心 は

すなわち かみ かみ もと あるじ
則 神 と 明 と の 本 の 主 たり
わがたましい いた なか こ ゆえ
心 神 を 傷 ま し る こと 莫 れ 是 の 故 に
め もろもろ ふじょう み こころ もろもろ ふじょう み
目 に 諸 の 不 浄 を 見 て 心 に 諸 の 不 浄 を 見 ず
みみ もろもろ ふじょう き こころ もろもろ ふじょう き
耳 に 諸 の 不 浄 を 聞 き て 心 に 諸 の 不 浄 を 聞 か ず
はな もろもろ ふじょう か こころ もろもろ ふじょう か
鼻 に 諸 の 不 浄 を 嗅 ぎ て 心 に 諸 の 不 浄 を 嗅 が ず
くち もろもろ ふじょう いい こころ もろもろ ふじょう い
口 に 諸 の 不 浄 を 言 て 心 に 諸 の 不 浄 を 言 わ ず
み もろもろ ふじょう ふ こころ もろもろ ふじょう ふ
身 に 諸 の 不 浄 を 触 れ て 心 に 諸 の 不 浄 を 触 れ ず
こころ もろもろ ふじょう おもい こころ もろもろ ふじょう おも
意 に 諸 の 不 浄 を 思 て 心 に 諸 の 不 浄 を 想 は ず

この祓詞の中で、明（日と月）を『かみ』と呼んでいる、日月の力は神というのである。日はその質において火と同価、月はその質において水と同価なのである。それは、中国古典『淮南子』にある――北極星を神霊化した最高神の太極（太一）は宇宙創成を担い、軽い澄んだ陽気を集積して『火』とし、その火の精が太陽となった。重く濁った陰気を集積して『水』とし、その水の精は『月』となった。――という説が原初にあり、日月は天空の両眼である。

<end>